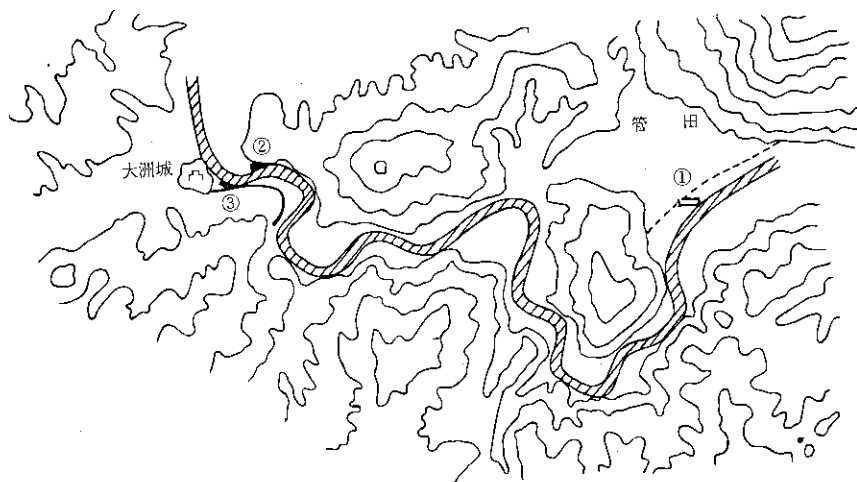


## 直轄改修事業の経過

### 1 古代の改修

文明は水とともにあるといわれる如く、古来、河川は舟運に利用され、また耕作のための水の補給源としてこれに沿って文化が発達した。河川に沿って文化が発達した理由は、農耕に必要な取水が容易であったからである。そこで肱川の古代の改修はどのような形でなされたかを種々調査したけれども河川に関する文献はなく、ただ次のような点が判明した程度である。総論の初めにも少しふれているが、現在の大洲は湖底であり、人家は藁田地区に密集し、ここで農耕が営まれていた。その後上流からの堆砂により徐々に盆地を形成し、元弘元年(1331年)大洲城の築城を境として武家屋敷や商家が集まり今の大洲の前征を構成した。そして肱川も今の個所より南よりの山手の方を流れていたし、久米川も城のすぐ下流を流下していたが築城のため現在地に開削をした。そして洪水時の水流を川の中心部に導き、土砂を沈澱させたり、堤防の破堤をくいとめるため水制(当地方ではナゲという)を要所要所にこしらえた。特に大洲城近くにある水制②③は城の下の深堀を永久化するために作られたと考えられ、管田の水制①は当時農耕の中心部だった管田地区の護岸を目的としたことはいうまでもないが、その水制を上流に向けて施工し(この形式を逆ナゲという)水制より下流部の流心がうまく水制②③に当るよう(下図のように蛇行する)位置をきめたということで、そのために朽穀を流して確認をしたとのことである。この



蛇行状態は600有余年の今日ほとんど変化はみられない。次に築城後は部落毎に河守を置き、河守は要築堤箇所とか修理箇所を庄屋に連絡をし、庄屋は城主に報告をして川の改修には意をもちいていたようである。また舟下りと称する殿様の舟遊びにも殿様自から改修工事には気をくば

り、舟の中から指図していたとの記録がある。勿論肱川についての改修費は藩費を以って支弁されていた。

## 2 肱川治水調査測量工事

内務省が適用河川の一斉調査を行なうことになり、肱川には昭和11年11月から石塚英雄（内務技手）を班長として矢崎一郎、竹内一義（両技手補）が補佐となり、昭和13年5月までの1年6ヶ月間（0 km～31.5 km 間）平面測量（1/2,500、1/10,000）や縦横断測量と合せて経済調査等の調べを行なった。

当肱川の河川法の適用は昭和4年2月9日に告示されている。

## 3 直轄改修工事の起因

昭和18年7月および9月の二度にわたる大水害により、戦時たけなわなれども内務省としてもこの災害を放置することができず、差し当り大洲町と新谷村の一部を築堤により守り人心の不安を一掃することになり、昭和19年6月1日から作業は開始された。当時の模様については下記のとおりである。

昭和19年5月30日愛媛県臨時県議会にて雪沢知事の説明要旨

昭和19年5月31日付朝日新聞

肱川改修は一刻もゆるがせに出来ないが、幸ひ内務省直轄で本年度から三ヶ年継続3321千円で着々その運びとなり、県はその約 $\frac{1}{3}$ 、すなわち114万円を分担する。この計画は昨年の大被害にかんがみ差当り大洲町の主要部をメグッテ強固な堤防を設け、またその支流矢落川の上流も堤防を築いて氾濫を防ぐもので、本年度の年割額6万5千余円のうち地元寄附1万3千余円、県債5万2千円である。地元の寄附は県負担額の2割を工事費に按分し、大洲町並びに新谷村がそれぞれ分担する予定である。（原文のまま）

## 世ノ同情ニ訴フ

愛媛県下肱川 ハ流路延長二十五里、其ノ間抱擁スル大小支川実ニ三百余ノ多キニ及ビ、往古ヨリ洪水ノ都度濁水氾濫シテ耕地面積二千四百町歩、人屋二千六百余戸ニ浸水シ、堤防護岸ハ素ヨリ道路橋梁モ尽ク破壊流失セラレ、時ニ人畜ノ死傷ヲ出シ沿川住民ハ堵ニ安ズルヲ得ザル悲運ヲ嘆キツツアルコト久シ。

従来災害毎ニ 藩及県に於テ之等造営物ノ復旧ニカメ来リシモ、経済上何レモ急的復修程度ニ止マリ、抜本的治水ノ施行ヲ為スヲ得ズ、為ニ沿流住民ノ蒙ル損害ハ直接被害ノミニテモ年約一百五十万円（県ノ調査ニ依ル）ト算セラレ、惨鼻ノ極実ニ名状スベカラズ其悲惨ナル様相ハ到底筆紙ノ克クスル処ニアラザルナリ。

**茲ニ於テ本流** ヲ改修シ其慘害艾除ニ昂ムルコトノ喫緊必須ナルヲ痛感シ、曩ニ肱川治水研究会ヲ組織シ之ガ実現ニ力ヲ效シ、漸ク大正十年六月臨時治水調査会ノ決議ニヨリ第二期直轄河川ニ編入セラルルニ至レリ。爾來十数星霜今尚改修実施ニ至ラズ、救済國ノ実ヲ見ザルハ聖代ノ痛恨事ナリトス。

**是等直接及間接** 被害ノ莫大ナルコト、並ニ其都度之ニ要スル復旧治水費ハ全ク本県下ノ首位ヲ占メ、他ノ第二期直轄河川ニ比スルモ其上位ニ位スル肱川ガ、未ダ工事実施ノ域ニ達セザルハ一僻陬ニ遍在シ交通不便ナルタメ名士ノ往來稀ニシテ、中央為政者ノ認識ヲ護チ得ザリシニ基クトハ言ヘ誠ニ遺憾ニ堪ヘザル所ナリ。

**試ニ其ノ氾濫** 度数ヲ掲グレバ、別刷大洲藩年譜（旧記アルモノ、ミニ依）ルニ見ルモ、元禄元年五月二十日ノ増水量二丈三尺、同二年八月ノ二丈二尺八寸ヲ始め、昭和十年九月ノ増水量一丈九尺二寸ニ至ルマデ、十五尺以上ノ氾濫実ニ九十三回ノ多キニ達セリ。カカル際ニハ市街市ト謂ハズ農村ハ素ヨリ、初頭掲載写真ノ如ク文字通り茫洋トシテ一面ノ泥海ト化シ、交通ハ水勢ニ厭セラレテ全然杜絶サレ、僅ニ決死隊ヲ編成シ小舟ヲ以テ人命救助ニ當リツツアル実状ニシテ是等住民ノ脅怖、精神上ニ及ボス打撃ノ深刻ナルハ勿論、廣大ナル沃土ハ一朝ニシテ荒無地ト化シ、産業經濟並ニ衛生上ニ蒙ル影響ノ甚大ナルハ蓋シ他ノ想像ノ及バザルモノアリ。併モ年々歳々此慘状ヲ反覆シツツアル地方民ノ衷情ハ如何ニ宿命トハ言ヒナガラ、天ニ神無キカラ疑ハザルヲ得ザルナリ。

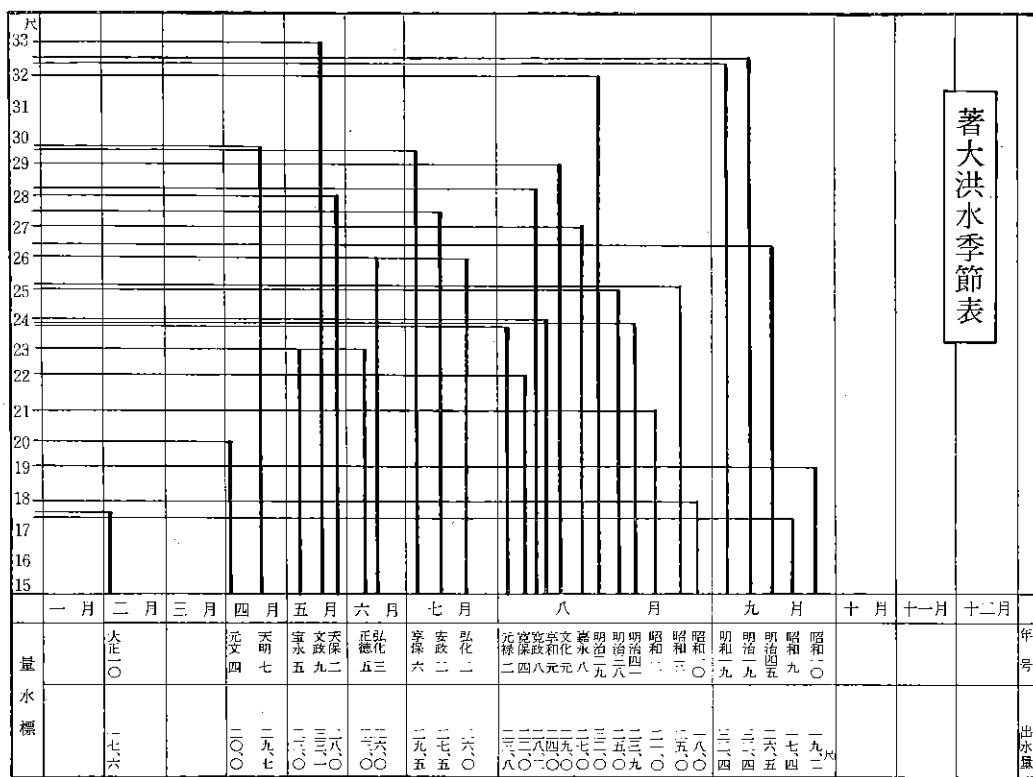
**近時政府ニアリ** テモ水害ノ防止軽減ニ関スル恒久の方策ヲ確立スルコトハ国民生活ノ安定上ハ勿論産業經濟發展ノ基幹ヲ培フモノニシテ邦家急務中ノ急務ナルコトヲ認メ、曩ニ広田内閣ガ其國策ノ一項目ニ災害防除対策ヲ採リ入レタルハ寔ニ適切且当然ノコトナリトス。県当局亦此慘状ト地方産業萎縮ノ現況ヲ確認セラレ百方奔走尽力セラレタル結果、漸ク昭和十一年十一月ヨリ内務省ノ手ニヨリテ実地測量ヲ見ルニ至リタルハ、暗夜ニ燈火ヲ得タル感ヲ抱カシメ感激措カザル処ナリ。然シ今後之ガ実現迄ニハ尚幾多ノ難關アルコトヲ覚悟セザルベカラズ。冀クバ我等ハ我等ノ祖先ニ享ケタルコノ国土ヲ損傷スルコトナク、之ヲ子孫ニ伝フル為メ国土ノ保全ト改善ニ向ツテ全力ヲ捧グルト同時ニ官民先輩各位亦此憐ムベキ実情ヲ愍察セラレ、地方民人ヲシテ安住ノ地ト生活ノ安定ヲ得セシメラレ、生業ニ勤ムト共ニ産業ノ振興ヲ榮シミ、惹テハ国力ノ充實ニ専念シ得ル様、一段ノ協力援助ヲ賜リ、速ニ治水工事ノ完成ヲ告ゲ、治水安國利水興國ノ実現ヲ期セラレンコトヲ、声涙共ニ熱望哀願シテ止マザルモノナリ。

**吾人ハ此悲惨** ナル実情ヲ放任黙視スルニ忍ビズ、茲ニ旧ヒ起チ改メテ肱川治水期成同盟会ヲ組織シ、世ノ認識ニ訴ヘ先輩識者ノ同情アル御救援ヲ得テ一日モ速ニ塗炭ノ苦ミヨリ救済セラレン事ヲ希フテ止マザルモノナリ。

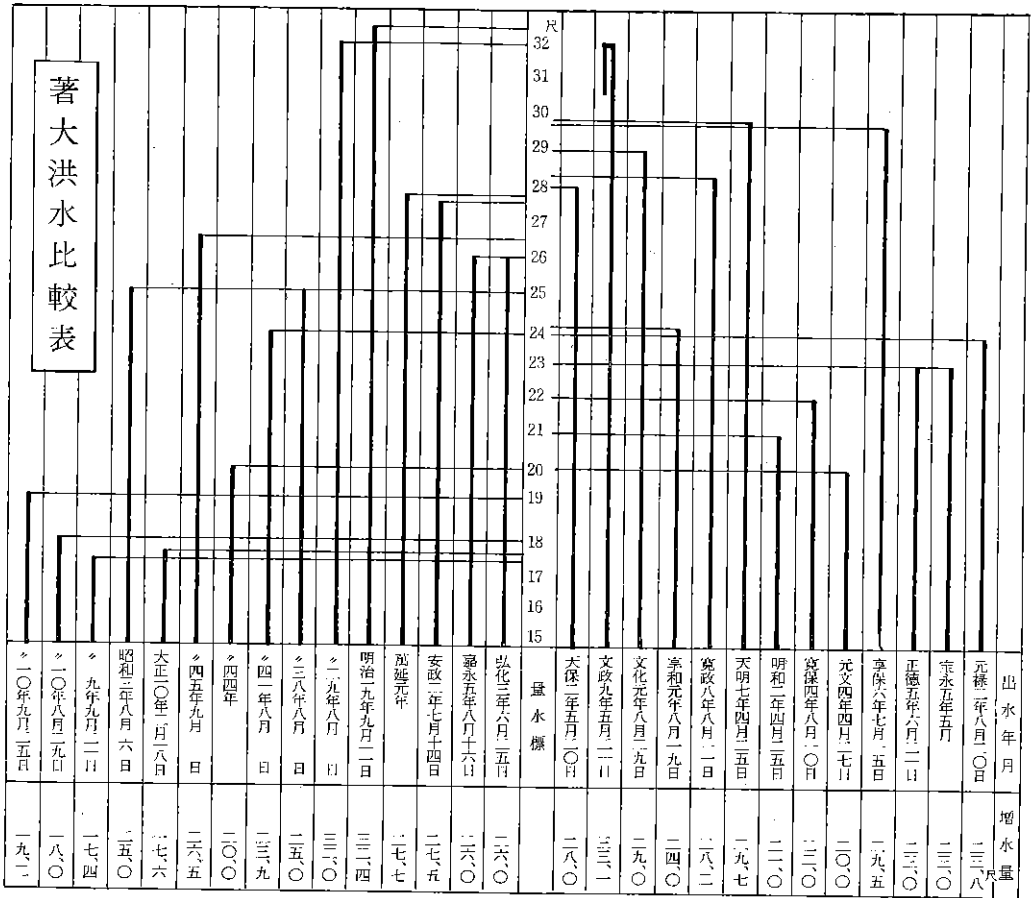
昭和十二年

### 肱川治水期成同盟会

会 長	大洲町長	吉 元 誠 一 郎
副 会 長	長浜町長	黒 田 直 保
	菅田村長	有 友 寿 次 郎
	三善村長	亀 岡 哲 夫
	粟津村長	三 瀬 嘉 三 郎
	白滝村長	木 谷 喜 重
	大和村長	西 山 幸 蔵
	櫛生村長	笹 本 元 三 郎
	新谷村長	森 野 久 太 郎



著大洪水比較表



## 災 害 の 記 録

肱川の災害は、過去 100 回以上にも及び（小さな出水は除く）その都度、田畑は流失し、沿川住民の生活は極度に圧迫され、死活問題をたえず引きおこしていた。

又、氾濫のたびに決壊個所の修理に、出水の水防に費用と労力の莫大な精力を、肱川流域の先人達はこの川に注ぎ込んだ。

以下記録を述べると下記のとおりである。（加藤家年譜より抜粋）

洪水年月日	増水量	計画高水位との水位差	記録にある被害状況
元禄元. 5. 30	23.0	約-2.40 <sup>m</sup>	加藤家記録の零点高8,587 m、樹形量水標零点高9,617 m
" 元. 7. 17	23.0	-2.40	樹形計画高水位 17.92 m。これをもって樹形水位に換算した。
" 2. 7. 17	23.9	-2.10	御城内初め御家中屋敷其他川筋村破損多し
" 2. 7. 28	23.0	-2.40	
" 2. 8. 20	23.8	-2.10	
" 15. 7. 28	23.0	-2.40	潰家 1,332 軒、男女 2 人死亡
" 15. 8. 20	25.0	-1.80	痛潰家 238 軒、
" 16. 8. 19	不詳		東風強く出水御家中屋敷破損多倒家 608 軒
宝永元. 7. 4	15.9	-4.60	御在所大風雨
" 4. 8. 18	21.9	-2.80	潰家 1,782 軒、女 1 人死亡
" 5. 5	23.0	-2.40	
正徳 4. 8. 8	19.5	-3.50	
" 5. 6. 21	23.0	-2.40	御家中初め 114 軒水入床上深 2 尺
享保 6. 7. 15	29.5		須合田御蔵床上水上米 1 俵通濡
" 6. 7. 16	29.5	-0.50	御在所洪水
" 7. 6. 24	不詳		
" 14. 8. 19 20	"		御在所大風雨川々満水
" 14. 9. 11	22.0	-2.70	御在所大風雨
" 20. 4. 24 26	26.0	-1.50	御在所出水
元文 4. 4. 27	不詳		
寛保元. 7. 22	16.0	-4.50	御在所風雨
" 2. 8. 21	17.0	-4.20	御在所風雨
" 3. 7. 7	13.0	-5.40	御在所風雨
延享元. 8. 10	22.0	-2.70	御在所風雨
寛延元. 9. 2	21.5	-2.90	御在所風雨刻々出水

肱川改修20年の歩み

洪水年月日	増水量	計画高水位との水位差	記録にある被害状況
宝暦 7. 7. 26	17.5	約-4.10	御在所風雨
" 12. 6. 26	不詳		在所強出水
安永 2. 5. 25	25.0	-1.80	強風雨にて出水
明和 2. 8. 1	21.0	3.00	洪水
天明 2. 8. 20	不詳		在所風雨洪水
" 3. 8. 12	28.0	-0.90	御在所洪水
" 4. 6. 6	不詳		永々雨天祈禱八幡宮
" 6. 8. 29	"		御在所大風雨半時許にて相止み
" 7. 4. 25	29.7	-0.40	御在所洪水
" 8. 9	27.8	-1.00	
寛政 4. 7. 12	27.5	-1.10	大風雨
" 4. 7. 25	27.5	-1.10	
" 8. 8. 11	28.2	-0.90	御在所風雨川々満水破損処有之出水
享和元. 8. 19	24.0	-2.10	御在所風雨川々満水
文化元. 7. 26	26.2	-1.90	御在所風雨川々満水溺死1人
" 元. 8. 29	29.0	-0.60	御在所風雨川々満水流死6人、御領分中潰家361軒
" 12. 7. 7	24.2	-2.10	御在所5月末より照続処6日強雨川々満水
" 13. 8. 23	24.5	-2.00	
" 13. 9. 4	24.1	-2.10	強雨川々満水
文政 4. 8. 1	24.0	-2.10	
" 4. 8. 8	25.5	-1.70	流死3人、潰家21軒
" 5. 1. 20	27.5	-1.10	
" 5. 6. 2	27.5	-1.10	御在所風雨川々満水
" 8. 8. 14	不詳		御在所大風雨近年無之烈風川々満水
" 9. 5. 21	33.1	+0.60	流死30人、流家46軒
" 9. 6. 6	22.5	-2.50	
" 10. 6. 17	25.0	-1.80	御在所強雨川々満水
" 11. 7. 2	23.3	-2.30	風雨烈しく川々満水
" 12. 5. 24	24.5	-2.00	後雨烈風川々満水
天保 2. 5. 20	28.0	-0.90	
" 3. 6. 3	26.6	-1.30	御在所風雨川々満水
" 6. 5. 14	20.0	-2.30	御在所風雨川々満水
" 6. 5. 21	20.0	-2.30	
" 6. 7. 6	不詳		

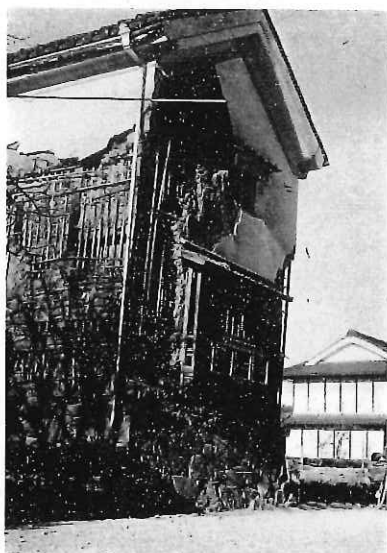
肱川改修20年の歩み

	尺	m	
天保 7. 7. 8	22.0	約-2.70	梅雨より降り続き此節大雨
" 7. 8. 4	22.0	-2.70	
" 9. 7. 21	27.0	-1.20	強雨川々満水
弘化 3. 6. 25	26.0	-1.50	御在所大風雨
" 3. 6. 28	26.0	-1.50	御在所大風雨
" 3. 7. 9	26.0	-1.50	御在所大風雨
" 3. 7. 18	26.0	-1.50	
嘉永元. 6. 13	24.5	-2.00	御在所風雨川々満水
" 2. 6. 13	不詳		御在所風雨
" 3. 5. 3	22.5	-2.40	御在所風雨川々満水
" 3. 8. 7	21.4	-2.80	御在所風雨川々満水
" 3. 10. 12	23.0	-2.40	御在所大風雨出水
" 5. 8. 16	26.0	-1.50	御在所烈風雨川々満水
" 5. 8. 22	26.0	-1.50	
安政 2. 7. 14	27.5	-1.10	満水常水より2丈7尺5寸
萬延元	不詳		
明治19. 9. 11	32.4	-0.10	明治以後藩の記録なし県の量水標による。
" 29	不詳		
" 38	"		
" 41	"		
" 44	"		
" 45	"		
大正 9	"		
" 10. 2. 18	"		
昭和 3. 8. 6	25.0	-1.10	
" 7. 7. 2	15.1	-3.70	
" 9. 9. 21	17.4	-3.00	室戸台風
" 10. 6. 29	15.0	-3.80	
" 10. 8. 29	18.5	-2.70	
" 10. 9. 25	19.3	-2.40	
" 11. 9. 25	4.55 <sup>m</sup>	-3.80	
" 12. 9. 11	4.85	-3.40	
" 13. 8. 1	7.43	-0.90	
" 14	5.77	-2.50	
" 15. 10. 20	2.73	-5.60	



肱川改修20年の歩み

洪水年月日	増水量	計画高水位との水位差	記録にある被害状況
昭和16. 7. 25	5.17 <sup>m</sup>	約-3.10 <sup>m</sup>	
" 17. 9. 21	5.91	-2.40	
" 18. 7. 24	8.60	+0.30	低気圧、不連続線による。死傷者131人、流失家屋554戸 (非住家含む)全壊家屋396戸(非住家含む)田畑流失、埋没 1,626.7町、床上浸水6,940戸(非住家含む)床下浸水3,876戸 (非住家含む)堤防(決壊、破損)59ヶ所、道路258ヶ所、橋 梁13ヶ所、砂防38ヶ所(以上肱川水系内)
" 19. 9. 20	4.67	-3.60	
" 20. 9. 18	8.79	+0.50	枕崎台風による。死傷者152人、流失家屋388戸、全壊家屋1,634 戸、田畑流失、埋没697.4町、床上浸水7,229戸、床下浸水2,686 戸、河川33ヶ所、道路820ヶ所、橋梁163ヶ所(以上肱川水系内)
" 21. 7. 29	5.46	-2.80	台風9号
" 22. 7. 9	6.09	-2.20	
" 23. 8. 26	5.30	-3.00	
" 24. 7. 5	4.30	-4.00	
" 25. 9. 14	6.24	-2.10	キジャ台風
" 26. 7. 14	5.24	-3.10	
" 27. 6. 23	3.39	-4.90	ダイナ台風
" 28. 6. 30	5.58	-2.70	
" 29. 9. 14	7.56	-0.70	台風12号
" 30. 9. 30	5.00	-3.30	台風22号
" 31. 9. 27	3.15	-5.20	台風15号
" 32. 6. 27	4.00	-4.30	台風5号、梅雨前線
" 33. 4. 23	5.28	-3.00	



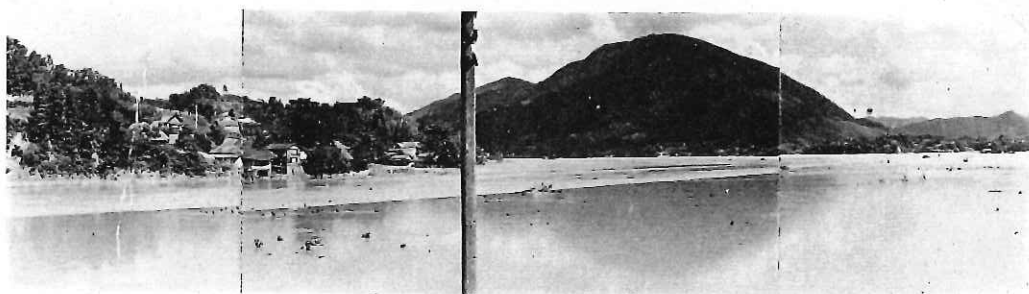
S.20.9 若宮地区の浸水状況  
(根跡調査による)



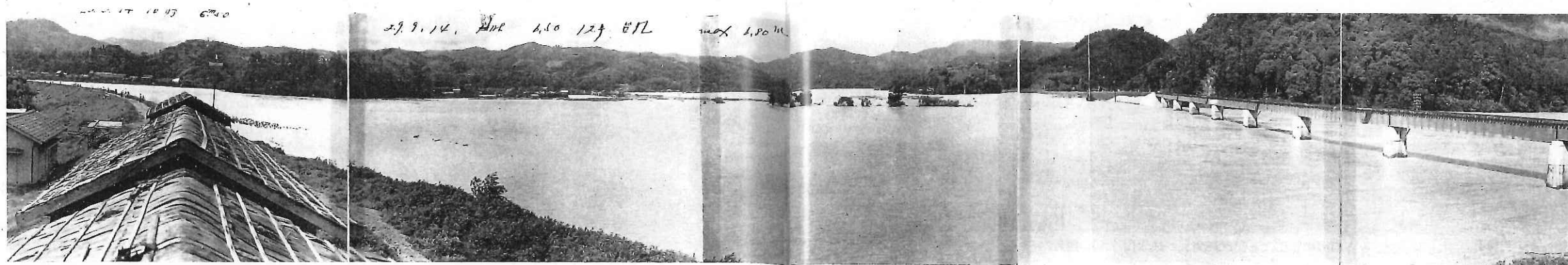
S. 25.9 (キジア台風) 国鉄予讃線の溢流  
状況=若宮にて



S. 25. 9 (キジア台風)  
喜多小学校前の浸水



S.25.9 (キジア台風) 予讃線五郎鉄橋より神南山を望む (大洲平野浸水状況)



S. 29. 9 大洲出張所から

久米川合流点を望む



2003年7月11日撮影

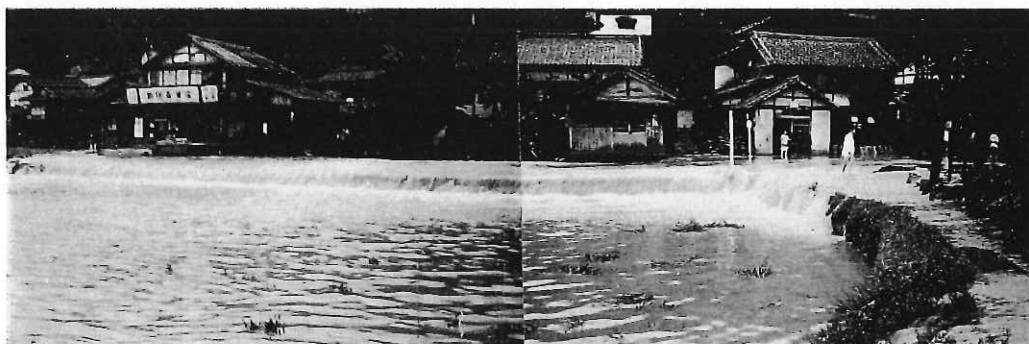
S. 35. 6 五郎駅前附近



S. 35. 6 梅雨前線による西大洲の浸水状況



S. 35. 6 五郎鉄橋より本川を望む

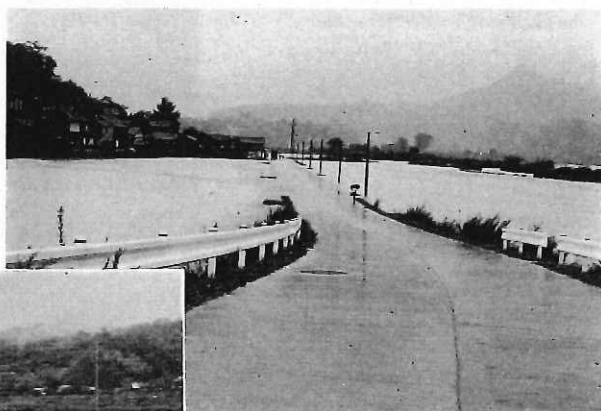


S. 35. 6 梅雨前線による出水西大洲、久米川 1.2K 附近



S. 35. 6 大洲平野の浸水状況

S. 38. 7 (9号台風) 十夜ヶ橋附近



S. 38. 8 (9号台風) 西大洲より  
久米平野を望む

# 荒れる肱川

## 1 荒れる肱川

昭和18年初夏は例年より少々早く梅雨に入り連日の霖雨は丹精凝らして作り上げた麦取り入れの雨間もなく、神社も寺院も麦乾場と化し種子麦だけでもと、熱乾を試みるなど一通りの苦勞ではなく、町の婦人も学童も勤勞奉仕で莫大なる働きのした。かくして稲の植付も終り五風十雨と平常を取り戻し夏作の仕付けを終了。決戦食糧増産の第一階機を完了し特に中耕除草施肥と第二階段に移らんとする時しも7月21日夕暮時、突如豪雨沛然として到り、二旬余の旱天続きの炎熱を一時に冷却する条尖く雨は生温き微風の中小止みもなく夜中降り通し翌22日におよびて益々激しく宛ら水だらの覆るが如くである。午前7時ついに三善村一部平野に氾濫し、8時には長浜白滝間の鉄道は山崩れのため不通となった。肱川は刻々増水する鉄道は長浜、下灘間も不通となる。しかも雨足繁くしていつおとえるべくもなく人心の不安漸く積る。

午後5時大洲警察署より警報発せられて避難を開始し、あるいは荷上げで高い所へ家具什器は勿論、畳も戸障子も上げて、いつ水がきても一物も濡らさぬ用意をなし、水に馴れた郡民は適当なる待避実施に余念がない。降る降る、1尺、2尺と刻々増高。深更にいたるも雨勢衰えず第3日目に入った。

暁天雨を透して見る大洲盆地は一大湖水と化し、町は水中に浮き、船によって救援を行ったり、往ききするのわずかであって全く1戸1戸の籠城である。午前3時頃水位26尺を最高として暫時の小止みによって減水に向い、一旦10尺余りに減水したるも、夜に入りて再び猛雨となり、薄気味悪き微風雨となり、暗雲低くたれて人心の不安深まる。桶水を覆すような大粒の雨は夜中止みなく第4日目に入りて暴雨益々域を奪い、未明には前日程度の水位となる。

河水刻々増水し、山を崩し、家を流し、田を流し、橋を流し、肱川は水というよりも竹木、木材、木炭、家屋破片、土砂などの混合流動体である。

先祖代々水禍と戦い抜いている大洲町民もこの水だけでは意表にでて第2次避難となり、山手の高地人家や寺院隔離病者から喜多国民学校階上、大洲町公会堂階上、あるいは乾藪倉庫や大旅館の二階などに小舟で避難した。

大洲警察署はこれを指揮し、かつ救助するに全力を傾注した。大洲警防団もこれに協力した。地方事務所員、大洲町役場吏員の集まり得た者は、大洲公会堂に炊きだし本部を設け、小舟を雇い入れて避難者に給食を行ったが、中村方面は激流のため舟運不能となり、児は飢に泣くも策の施す術がなかった。午後に至っては電話も不通となり連絡は絶えた。舟が電線上に浮ぶ処もあれば激流のため網を張って繰る者もあり、天井にもいられなくて屋根上にでて救を求むる者もある。10数頭の乳牛の足掻き溺れるあれば、揺ぐ急流中に運を天に委して籠城して水位を見つめる者あり。24日午後5時頃を最高として水位28尺、肱川の本支流隅なく氾濫決潰して山津波となり、流域は泥海と化す。戸数17,700余、人口86,200を抱擁する33方里の全部は阿鼻叫喚の巷となった。

その最も激甚を極めたものは大洲町で3,500戸の内流失35戸、倒壊20戸、床上浸水3,150戸におよんで被害なきは四囲の小腹の人家若干のみであった。被害の程度は大洲町を中心として描ける円の半径に逆比例して四周におよんだ。すなわち平野村、南久米村、菅田村、新谷村、三善村、粟津村、白滝村および大川村、天神村、大瀬村、櫛生村、喜多灘村など全郡におよんだ。もっとも山津波のために前記の例外を生じた大瀬村の死者10名、粟津村の11名、大川村の家屋倒壊流失20戸櫛生村、喜多灘村の山崩れの如く局部的に大損害を生じた。

### 被害の様相

県下一円を襲った豪雨も中予、南予に激甚を極め3日3晩も降り続けた水量は松山測候所の測定で530余%、中心をなした喜多郡は正確に測定されてないが恐らく松山地方より数割多いことは被害の状況で何人も肯定した。大体700余%だろうと言われた。坪当り13石位降ったと推定された。この大量の雨水は地表を小川の如く流れて支流から本流へと押しかけた。川は到底呑み切れない。大地は3日3晩におよんで夥しい雨水を吸われし吸った。遂に喜多の山々は一大貯水池と化し飽和の姿となりその水圧は地表の軟弱を求めて噴出した。南久米村長谷の大崩壊は鳥坂峠の天迎より部落も氏神様も人命も美林も一呑みにして、小川に押しだし、谷々の崩壊を合せ所謂山津波となり、沿岸の人家も人命も道路も田も畑も併呑しつつ、肱川本流まで2里余り猛暴の限りをつくした。同村北裏の崩壊は平野村に押し出し堤防を崩し、学校を埋め、美田を土砂と樹木の白骨で埋めたり、人命を奪ったりして久米川を荒し、阿蔵、西大洲120町歩を赤粘土で埋めた。粟津村米津では寺に避難している11名を生き埋めにして生命を奪い、3名の死体は遂に発掘にいたらない。大瀬村では、崩壊が濁流渦巻く小田川を押し切り、予想もつかぬ対岸の人家をつぶし、10名の命と5戸の家屋を流した。天神村でも同様の山崩れが小田川を扛き止め、河水逆流し対岸の人家は浮いて川上に流れ、3名の生命を奪った。大川村桐畑部落では13戸流失、7戸倒壊して一部落影を止めざるにいたった。白滝村戒川の大崩壊は加屋200余戸の町を軒に達するまでに土砂で埋めて1ヶ月余り県道も通行できなかつた。櫛生村衛生でも10戸を押し流し、数戸を半壊にし、田や小川や道路を噛み取って仕舞った。喜多灘村はそこにも、ここにも鉄道を押し切る崩壊が生じたなど、枚挙にいとまなく、林産物検査所で調査した処によると郡内山林の崩潰360余ヶ所であった。この外文字通り、亀裂網の目の如く南久米、喜多灘、粟津、白滝、肱川などを丁とし、向後憂慮に堪えざるものが郡内到處に生じて、全く山々は涌き崩れたのである。かくの如き山津波が肱川本流に押しかけたため、河床は高くなり、氾濫言わん方なく堤防も道路も抗すべくもない。沿岸平地は一大黄河と化し、湖水と化し、電柱も没してその上を舟をこいだ処もあった。かような山津波の惨害と趣を異にして水害がある。その最も激甚なるは大洲町で3,500戸、人口15,000の町で、浸水家屋実に3,150戸、内二階以上に達したものが約1,000戸ある。肱川鉄橋の左右と、その下流とが堤防決潰したことは大洲駅附近に激流突っかけ、鉄道を押し切り、若宮方面に破壊の限りを尽し、殿町で氾濫した流勢と合し、目もあてられぬ姿となっ

た。流失 35 戸、倒壊 20 戸は中村、若宮附近に生じた。県道と駅前道路の分岐点附近より、喜多国民学校附近にかけての惨状は物凄いものである。肱川鉄橋右橋台は奪われ、鉄路は宙に吊された。大洲駅左右の 2 m 内外に盛り上げた鉄路は 56 ケ所流されて大きな川となり、濁水を湛えた中に没した。耕地は上流から礫、砂、細砂、泥土、粘土の順に埋められ、深さ 5.6 寸から 6 尺位におよぶ所もできた。また畑や道路は反対に掘り割られて、川ができたりもした。新谷村の矢落川流域も非常に荒れ、矢落橋附近を第一とし、下流各所に広大なる被害を受け、良田を河原にした。新谷町も 300 余戸の浸水家屋を生じ、泥土で塗り潰された。天神村五十崎町には、小田川による耕地の流失あり、菅田村では村島の折角竣功した許りの開田 50 町歩が揚水設備諸共肱川によって叩き潰された。三善村も堤防決潰により春賀平地がすっかり荒されて叩き潰された。幸に昼であったこと、風が無かったことが、人命の損傷を最少限に止め、かつ被害をこの程度に止め得た所以で不幸中の幸であった。要するに前述の如く被害の様相は山津波によるものと水害とに分れる。

## 被 害

肱川水害史を記録に辿ると、元禄元年 5 月 30 日の 23 尺を初めとして、加藤家年譜にみゆるもの以下昭和 13 年 8 月 1 日までに 89 回ある。その内 25 尺以上の洪水と称するもの 34 回で今次 23 日の 26 尺は 35 回目である。また 28 尺以上は 10 回であって 24 日の 28 尺は 11 回目となる。その最たるものは文政 9 年 5 月 21 日の 33 尺 1 寸で流死 30、流家 46 軒とある。元も明治以後は県の量水標によるもので、藩政時代の常水より何尺という測定の基礎も同一といい得ざるべく、且また人口増加に伴ない流域は開墾せられ、山々は年々削られて、砂礫を流出し河床の増嵩は否めないから往昔のものと対比することは困難であるが、古者の言によると、明治 19 年 9 月 11 日の 32 尺 4 寸に比し、今次 8 月 24 日の 28 尺がより水位高く、被害も甚大であるという点から少くともその頃よりは河床 6 尺は高かるう故に氾濫の水位からみて考察対比すれば 34 尺というべく、兎に角記録に存する限りの肱川水害史上において今次惨害におよぶものはない。

加え前述の山津波で、郡内到的処酸鼻を極め死者 46 名、流失倒壊家屋 235 戸、非住家 443 棟、半壊住家非住家合せて 345 戸、床上浸水 4,719 棟、床下 2,984 棟、流失埋没の田 483 町歩、畑 282 町歩、浸水田 910 町歩、畑 964 町歩におよびその内収穫皆無の田畑が 1,000 町歩に達した。外に道路、橋梁、堤防、鉄道の被害は枚挙の限りでない。これらの被害金額や町村別状況は次のとおりである。



昭和18年7月 喜多地方事務所管内被害状況調  
9月 水 害

(上段9月)

町村別	死亡	住 家					非 住 家					田		畑		山 林		宅 地	
		流失	全壊	半壊	床上 浸水	床下 浸水	流失	全壊	半壊	床上 浸水	床下 浸水	流失	浸水	流失	浸水	流失	浸水	流失	浸水
大洲町	2	23	28	54	1,000 3,000	500 150	89	113	51	23	300 738	150	310	130	450				
平野村	4	4	5	2	27	43	15	11	20	19	15	38	14	2					
南久米	8	1	13	8	1 6	9 30			16	4	3 1	2 4	10	40	32	10	64		
菅田		5 6	1	2	50 164	120 82	3 15		5 10	5 87	60 82	52	60	20	200	100			
大川		15	2	3	4 34	5 15	10				20	3	13	6	7	3			
大脇川	1	1	3	1	1 82	25	3	2	9	21	3	18	8	3	5	30		20	530
御抜			1 1		1 1	2		3 5	2			2	6	2	2	31	1		
天神	3	1	5		38	230	3	16		13	51	44	90	5	5				
五十崎			2	30	78 191	160 62	3	2	10	15 20	17 50	18	37	2	6	1			
内子町					8	51	4	2	1		5	3	45	5	2				
五城			4		4 2	1 6			1		12	13	1	4	10				
大瀬	10	5	5	11	1 5	10	6	3	6	1 6		3	10	2	4				
立川			1		2 1	11		1			3	1	5			5	300		
満柳	3	1	4	4	8 4	5 2	9	3	4	7	4 5	5	14	3	4	15			
新谷			1 3	5	185 253	108 5		18 15	4	153 127	100 130	30	150	12	35	45			
三善	3	10	5	10	40 108	95 26	2 18	12	3	40	13 60	3	52	21	62				
粟上須	11	4 11	1 19	3 21	150 280	95 127	4 11	18	2 11	43 240	29 107	13	49	20	125	35	2,500		
白滝		7 7	12	2	140 172	49 31	10 10	11	4	18 95	10	2	7	6	5				
大和	3	6	2	16	3 100	75	9	2	3	35	15	4	16	5	10				
出海		1 4	2	8	120 94		1		1		110 92	3	7		4	1			
櫛生		3 7	4	5	9 5	35	2 2	1	3		34	3	3	1	22				
長浜		2	2	8	25 30	130 458		1	2	10				1	1	1			
喜多灘	1	3 10	13	6	8 13	14	6		13		6	64	20		33		773		
合計	45	28 113	7 122	57 204	1,779 4,482	1,431 559	32 204	21 239	25 149	237 743	645 1,425	492	930	303	965	356	63,593	530	

## 2 第 二 水 害

9月19日、1ヶ月余り照り続いて雨となった。昼下り頃から土砂降りとなって来たが、そうたいした雨量ではない。けれど第一次水害の脅威なお覚めず濁流の怒号まだ耳底にあれば人心安らかならず、堤防の仮工事は頼り乏しくかつ河床は到る所増嵩して氾濫の公算大なるが故に警戒おさおさ怠りなく、日没と共に荷上げ待避を了した。翌朝ついに氾濫し刻々増水して午後2時頃量水標は22尺2寸となった。たいした雨量でなかったけれども本、支流ともに吐き切れぬ土砂が河底を流動して濁水を溢れしめたのである。第一次の水害でふればこぼれそうな崩壊の山野は凄しく押し流された。砂上に築き上げられた仮工事は危くも潰えて河流滔々として放縦を極め田畑を荒し、家を浸し、またまた第一次水害の姿に返り、55日の復興努力は文字通り水泡に帰した。稲の植替へは丁度出穂期であったために水を含んで結実せず、代作の蕎麦は流され大豆も、玉蜀黍もなんにもならない。営々と取り除きたる耕地の土砂はまた元通りに盛られ、やっと埋めた所はまた掘られて川や水溜りとなり、鉄道も堤防も元々通りに壊された。第一次水害がなかったなれば斯くも被害を生ずる水でないが、生々しい創痕の仮り処置だから何ともいたし方なく全く元の姿に返った。特に前回よりも被害の激甚を極めたる地方が出来た。即ち今回は海岸に雨量多かりしたため源を海岸、山岳に発する溪谷沿いの柳沢、溝穂、大和村等は川沿の道路も耕地も護岸も殆んど噛み取られ洗い流されたのである。呼々天の試練まだ足らざるか、地の努力まだ及ばざるか、人の誠なお乏しきか、全郡各町村またまた第一次水害同様の破壊に見舞われたのである。幸いに山津波が伴わず人家人命の被害が僅少であったことは不幸中の幸であった。